

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2021年 春・夏合併号
第12巻第1号(通算32号)
2021年7月31日発行

2021年 AJEQ第13回全国大会に向けて

杉原 賢彦(目白大学)

日本ケベック学会2021年大会に向け、現在、着々と進行中……と書ければよいのだが、そうは問屋が卸してはくれない新型コロナ禍の現況。7月31日の企画・実行委員会において、昨年を引き続き、今年もオンライン開催が決定され、その後、理事会によってこれが認められた。8月に入り、毎日のように更新される新規感染者の数字は、対面での開催の困難をなにより如実に語るものだろう。

当初の開催予定校代表として、教室貸し出しの是非についてギリギリまで問い合わせを続けていたが、秋学期の授業形態などもまったくの不透明な状態にあり、教室貸し出しの有無もまた、同様に先行きが見えないという状況。オンライン開催に踏み切らざるを得ない最大の要因となっている。

とはいえ、オンライン開催についてはなにより昨年の実績もあり、また遠方から感染リスクに曝されながらお越しいただく危

険性を排除できるという利点があるのも事実。これらの強みをどう生かしてゆくかが、今年の大会のポイントとなるはずだ。そのための準備が、いままさに進行中だ。

その2021年AJEQ第13回大会は、10月9日(土)に開催予定。Zoomによる双方向性を確保したオンライン大会となる。

2021年の大会について、当初より対面およびオンライン開催の双方をにらみつつ、1日に集約して実施することを目標としてきた。その結果、今年度大会は、一昨年までの時間割フォーマットとほぼ同様のものとなる。午前9時15分から受け付けをスタートし、午後の18時まで。閉会式ののち、オンライン懇親会によって親睦を深めていただくという段取りとなっている。

いまや各大学ともオンライン授業がほぼ常態となり、Zoomによるやりとりなどもそれぞれ慣れた状況かとも思われるので、対面と同様の集中した発表と討議が行われ

●本号の内容●

巻頭言(杉原 賢彦) …1

アカデミー・フランセーズがケベックの職業名詞等の女性形化をついに容認(矢頭 典枝) …3

モンリオール留学紀行(荒木 隆人) …5 立花会長とエティエ名誉会員の叙勲(小倉 和子) …8

るのではないかという感触も抱いている。

そのなかで今年のシンポジウムは、2020 年に引き続いてユニークなものになる見込みだ。昨年は、新型コロナ禍のなかでの現代ケベックのアートとその動向に焦点を当てるものとなったが、今年はケベックの映像とその表象を日本との関係のなかから見て考えてゆくものにしたいと目論んでいる。そのうえで、主題を「ケベックの映画とアニメーション」と定め、副題を「映像文化とその表象をめぐって —— ケベックと日本」とした。

ケベックと日本は、意外なことかもしれないが、映像文化の世界において他に例のない関係を築いてきた。その中心となったのは、1977 年に開始され、一時は北米最大の規模を誇ったモントリオール世界映画祭であり、そのキーパーソンとして映画祭に尽力してきた人たちだった。まさにそのなかのひとりであった映画評論家であり作家でもあるクロード・ブルアン氏に基調講演をお願いしている。とはいえ、いわゆるワクチン・パスポートの運用がすでに開始されてはいるものの、ケベックはいまは遠く、またご高齢ということもあってビデオ録画で参加いただく予定となっている。これも Zoom を利用して行い、AJEQ よりの有志による Q & A も合わせて収録することになっている。

さらにこの後、現代ケベック映画を世界にふたたび認知させるきっかけとなったグザヴィエ・ドランについて、いち早くドラ

ン研究書 *Re-Focus: The Films of Xavier Dolan* (Edinburgh University Press, 2019) を編纂・上梓したアンドレ・ラフォンテーヌ会員 (筑波大学) から、現代ケベック映画の状況と動向について報告をいただき、さらに昨年『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』を配給されたアニメーション研究家・土居伸彰氏より、カナダとケベックのアニメーションについて報告をいただく。また、本稿筆者でもある杉原賢彦 (目白大学) は、ブルアン氏の講演に並走しつつ、ケベックと日本をつないだ最大の功労者ともいえる映画監督クロード・ガニオンを中心として、ケベック = 日本映画について、再考察する心づもりでいる。

以上がシンポジウムの概要となるが、今大会ではこれに加え、特別ゲスト的な位置づけでもうおひとりに講演をお願いした。世界的なアニメーターであり、近年は NFB (カナダ国立映画庁) との共同製作も手がけられている山村浩二氏 (東京藝大) にご登壇いただき、知られざるアニメーション大国 = カナダについて、ご自身に影響を与えてきたカナダ・アニメーションの魅力について等、お話しいただく予定。

ケベックと日本、あるいはカナダと日本が映画とアニメーションを介してどのような歴史を育んできたのか、そして 21 世紀のいま、どのようにこれを深めてゆけるのか、その可能性を探れればと思う。そしてさらに、今大会がこうしたことを考えるきっかけになってくれることを願ってやまない。

Zoom による双方向通信が、映像によるコミュニケーションの新たな地平を切り開きつつある「いま」だからこそ！

(第 13 回全国大会実行委員)



<寄稿>

アカデミー・フランセーズがケベックの職業名詞等の女性形化をついに容認

矢頭 典枝 (神田外語大学)

去る 5 月 23 日、日本フランス語フランス文学会 2021 年度春季大会で「ケベック・フランス語の包括書法：職業名詞等の女性形化と通性的な書き方」と題する報告を行った。私はこの学会の会員ではないが、会員になっている立花史氏と片山幹夫氏（ともに AJEQ 会員）のお誘いを受けた。このようなメジャーな学会に私のような者が誘われるとは何事か、と思ったのだが、ケベックがすでに実施しているフランス語の書法がフランスで注目を浴びているため、これについて知っている研究者に当学会のワークショップに登壇してほしい、とのことだった。というのは、2019 年 3 月、ケベックがかなり前からすでに実施している職業名詞・肩書等の女性形化をアカデミー・フランセーズが容認すると発表したのだった。ちなみに、従来、アカデミーは、“professeure”、“auteure”、“chercheure”などの女性形は「全

く破格用法 *véritable barbarisme*」だ、などと主張し、ケベックのこの実践を辛辣に批判していた。

また、その前の 2017 年、フランス語のなかの男女平等を目指す「包括書法 *écriture inclusive*」の一部（分かち表記（*un.e facteur.rice* のような書き方）がフランスの初等教科書に導入されたことがメディアの注目を浴び、2021 年現在もその実施の可否についてフランスで物議をかもしている。

「包括書法」はケベックでは「通性的な書き方 *rédaction épiciène*」と称し、これもかなり前から提唱され、現在も推奨している書法である。

「*l'écriture inclusive* 再論」と題するこのオンラインのワークショップでは、まずコーディネーターの立花氏がフランスにおける包括書法の定義と成立過程について論じ、続いて片山氏が包括書法の提唱者が言及する「近接語への一致 *règle de proximité*」について歴史文法の観点から検証し、Olivier Ammour-Mayeur 氏の発表では、包括書法に触れつつ、職業・肩書の女性形化に関する 2019 年のアカデミー・フランセーズによる報告書を主に検証した。

最後の矢頭報告は、「ジェンダーの視点からみるケベック・フランス語の言語政策—「通性的な書き方」の定着を目指して—」（『ふらんぼー』42 号、東京外国語大学フランス語研究室、2017 年 https://researchmap.jp/yazu-n/published_papers) の内容に最新のケベック州内の動向を加え

たものであった。まず、アカデミー・フランセーズのこの方針転換の 40 年以上も前から、ケベック州では 1976 年に女性大臣の名称を *la Ministre* とする動きを発端として早くも 1979 年にはケベック州政府が正式に職業名詞の女性形化を推進する旨を発表していたことを指摘した。そして 1981 年、ケベック州政府の官報では「職業名詞・肩書の女性形化」のみならず「文体における男女平等の実現」をフランス語の書法として打ち出した。これが、ケベック州政府の言語機関であるケベック・フランス語局が 1991 年に発行したフランス語の包括書法についてのガイド *Au féminin: Guide de féminisation des titres de fonctions et des textes* の基盤となった。これを 2006 年に更新したガイド *Avoir bon genre à l'écrit: Guide de rédaction épïcène* のなかでは、「人の呼称（職業名詞・肩書など）の女性形化」よりも「文書作成全般における男女平等の表れ」に重点が置かれ、これを「通性的な書き方（*rédaction épïcène*）」と呼んだ。2000 年代中頃にはすでにある程度、人の呼称の女性形は定着していたと報告されていたが、2021 年 5 月、報告者が女性の大学教員と弁護士の肩書を調査したところ、調査対象となったすべての肩書の女性形化が確認された。

ケベックが現在も普及に努めている「通性的な書き方」とは「文書における女性の存在の可視化 (*la visibilité aux femmes*)」と「文書の読みやすさとわかりやすさ (*la lisibilité et l'intelligibilité des textes*)」とのバ

ランスを取った書き方である。これを可能にするには、通性的な書き方の一般的原則の一つである「考え得るすべての方法を駆使する」ことが重要であるとケベック・フランス語局は主張し、主な工夫として以下を提唱している。

(1) 人の呼称を *le directeur et la directrice* のように男女両形のセット (*doublet*) で書く。*les étudiant-e-s* のような分かち表記を避ける。

(2) *doublet* によって文が冗長になる場合、集合名詞、役職あるいは所管を表す名詞、あるいは総称名詞を使う。例えば、*employés et employées* の代わりに *personnel* を使う。

(3) 通性的な代名詞を使う。例えば、*il* や *ils* の代わりに *vous*、*duquel* の代わりに *de qui* を使う。

(4) 文の構造を変えて、男女別の人の呼称を表さないようにする。

2018 年 7 月のケベック州政府の官報では、「通性的な書き方」を求人広告や年次報告書などの行政的な性質を有する文書での使用を勧告するとともに、文書における完璧な男女平等を目指す必要はない、という柔軟な姿勢が打ち出されている。

最後に、ケベックのフランス語の包括書法の普及はケベック・フランス語局のウェブサイトによって円滑に行われている点、ケベックにはアカデミー・フランセーズのような政府とは独立した保守的な組織が存在せず、新しいものを受け入れ、そこからまた新しいものを作り出す土壌があること

を指摘した。さらに、ケベックの包括書法にみられる男性と女性の存在の絶妙なバランスの追求は、カナダの国家レベルの公用語政策にみられる英語とフランス語のバランスのとり方と共通点があることも指摘した。

1635 年に設立され、フランス語の守護神を自認する、かの伝統的なアカデミー・フランセーズが、他のフランコフォニー諸国が推奨するフランス語への人為的な操作を容認するのは画期的な出来事だといえる。また、本ワークショップの登壇者 4 名のうち 3 名が AJEQ の会員で、最後の質疑応答では立花英裕 AJEQ 会長が発言し、他の AJEQ 会員も多く参加したことから、AJEQ の存在を日本フランス語フランス文学会の皆様に知っていただく良い機会となった。



クリレー連載「ケベックと私」第 9 回> モンリオール留学紀行

荒木 隆人 (広島大学)

私が初めてモンリオールを訪れたのは、2008 年の 11 月下旬であった。修士号を取得した後、ケベック政治研究を深めるためにはカナダへの留学が必要不可欠であるとは自覚しながらも、なかなかカナダ留学への本腰が入らず、博士も 2 年目になっていた頃だった。最終学年が近づく頃になって、ようやく留学を決意したのである。多くの

人からモンリオールは寒いところと聞かされており、見知らぬ土地で到着後すぐに冬を迎えるのは大変に不安だった。さらに、この留学では通常の大学院生の留学のように、大学院への入学があらかじめ決まっていたわけではなかっただけに、一層不安であった。語学力も人脈のあても全然なかった。本当に勢いだけで、とにかくモンリオールに飛び込んでみたという感じであった。

まず、民間の語学学校でフランス語を学びながら、大学院への入学を目指すことにした。大学院の入学に関しては、私の関心のあるケベック・ナショナリズム、マルチ・ナショナリズム研究の第一人者であるケベック大学モンリオール校 (Université du Québec à Montréal) のアラン・ギャニオン (Alain Gagnon) 先生にまずご連絡をすることにした。

今にして思えば、多くの著書の執筆を抱え、研究所の所長などでお忙しいギャニオン先生にまったくの紹介もなく、どこの誰ともわからない外国人がいきなりご連絡をするのは大変な失礼であったと思う。しかし、ギャニオン先生は、そのような私にもお時間を割いてお会い下さり、研究上の有益なアドバイスと、古地順一郎さんをご紹介下さった。2009 年の 3 月、コート＝デ＝ネージュのオリビエリという本屋兼カフェで古地さんにお会いし、多くの励ましのお言葉を頂き、本当に有難く感じたことを覚えている。その後、古地さんから廣松勲さ

んもご紹介頂き、少しずつではあるが、カナダでの人間関係も広がってきた。

この最初の留学中、無謀な試みの中でいつも気落ちしがちだった私を励ましてくれたのは、最初にホームステイでお世話になったホストマザーのアルビーナ・ボルトルーシ (Albina Bortolussi) さんである。アルビーナさんは、イタリア系カナダ移民であるが、カナダに移民する前、アルゼンチンに住んでいたこともあり、イタリア語、英語、フランス語に加えてスペイン語も話される方であった。日常の何気ないアルビーナさんとの会話でどれだけ精神的にも語学的に

も救われたかわからない。

その後、民間の語学学校からケベック大学付属のモンリオール語学学校への転校を経て、2009 年度冬からケベック大学モンリオール校の政治学研究科に入学した。そこでは、ギャニオン先生から、指導教授としてマルク・シュブリエ (Marc Chevrier) 先生をご紹介頂いた。シュブリエ先生は、まさに学問に真摯な紳士という形容が似合う方であった。ようやく念願の大学院に入学できたことは大変に嬉しかったが、本格的な大変さはむしろ入学してからだった。大学院でのコースワークと修士論文執筆の



ケベック大学モンリオール校



メトロのスノードン駅前

日々は、想像以上にハードだった。しかし、そこでも多くの友人に助けられた。修士論文作成の前には、シュブリエ先生と一対一で修士論文に関連する文献を読み報告するセミナーも受講し、大変に鍛えられたと思っている。

大学院自体は大変だったが、モントリオールという街は実に魅力的な街だった。気晴らしに様々なところをよく散歩した。メトロの地図を持ちながら、友人とすべてのメトロの駅から降りて駅周辺を目的もなく散策したりした。聖ジョゼフ礼拝堂の前の芝生や、ジャリ公園、ラフォンテーヌ公園などはお気に入りの公園だった。また、勉強の合間に、よく近所のノートルダム・ド・グラーズのコンコルディア大学ロヨラキャンパスの庭や、人気のない駅のベンチにただ座っていたりしたことも、よい気分転換になった。

ケベック州での留学は結局 3 年半に及んだ。長い留学を終えて帰国し、大学に職を得た後も、何度もケベック州には行ってい

るが、今思いだしてみても、自分の中では 20 代後半で初めてモントリオールを訪れた最初の年が一番強く印象に残っている。沢木耕太郎が、旅の適齢期は 20 代後半というように述べていたかと思うが、そういうものがあるのかもしれない。

「本来未経験は負の要素だが、旅においては大きな財産になり得る。なぜなら、未経験ということ、経験していないということは、新しいことに遭遇して興奮し、感動できるということであるからだ」(沢木耕太郎『旅する力 深夜特急ノート』(新潮文庫、2008 年) より)



<寄稿>

立花会長とエティエ名誉会員の叙勲

小倉 和子 (立教大学)

令和 3 年春の外国人叙勲受章者として、本学会のシュザンヌ・エティエ名誉会員が日本政府より旭日双光章を受章した。

エティエ氏は 2007 年から 2010 年までケベック州政府在日事務所代表を務めた。政治学の博士号取得者で、在職中は一貫してケベック州政府の国際関係業務にたずさわった方である。ローマやボストンでの勤務を皮切りに、1997 年から 2002 年まで産業貿易省でアジア太平洋部門を主宰し、その間、ケベック・日本・ビジネス・フォーラムの理事長も務めた。また、2002 年から 2005

年までケベック州政府在パリ事務所の経済問題第一顧問をつとめ、その後、経済開発・革新・輸出貿易省の企業開発部長を経て、2008 年に日本に赴任した。

日本滞在中は、ケベック州から政府関係者のほか、経済使節団や、教育・文化団体の代表など数多くの代表団を受け入れ、さまざまな分野で日ケ交流・協力を促進した。今回の叙勲は、エティエ氏が日本とカナダ・ケベック州の相互理解を深め、関係強化に貢献したことに報いるものである。エティエ氏は 2008 年に AJEQ が発足した当初の在日事務所代表であり、産声を上げたばかりの AJEQ が支援や助言をお願いすることも多かったが、穏やかで控えめなお人柄がとても印象に残っている。

2011 年 1 月に離日し、2012 年に州政府を退官してからは、2014 年までモンレアルの *Mosaïcultures internationales* で国際関係を統括していたそうだ。ケベックには園芸愛好家が多いが、エティエ氏も例外ではない。退官後もこのようなユニークな活動を通してご自分のキャリアを生かすというのは、じつに彼女らしい選択だったのではないだろうか。これからもお元気でお過ごしください。

さて、2 年越しのコロナ禍はいっこうに終息の兆しを見せないが、その閉塞感を打ち破るかのようには、AJEQ にとってはめでたい話題が続いた。本学会の立花英裕会長も、フランス政府より教育功労章のオフィシエ章を受章されたのである。立花会長はすで



シュザンヌ・エティエ氏
(拓殖大学で開催された 2010 年 AJEQ 大会にて)

に 2002 年にフランス政府より教育功労章のシュヴァリエ章を、2009 年にはケベック州政府よりアメリカ地域フランコフォン功労章を受章している。さらなる受章には「そんなに欲張らなくても…」というやっかみの声も聞こえてきそうだが、これまでの驚異的な仕事ぶりやご苦勞を思えば、ごく順当な結果だろう。

立花氏の研究活動はフランス文学、フランス語圏文学（とりわけカリブ海文学、ケベック文学）、フランス語教育、フランス社会学、翻訳などきわめて多岐に渡るため、その全容を紹介することは私の能力の及ぶところではないが、今回の受章において、フランス領カリブ海諸島の作家エメ・セゼールやエドゥアール・グリッサンに関する研究、および 20 世紀フランスの社会学を牽引したピエール・ブルデューの浩瀚な著作『国家貴族』の翻訳が高く評価されたことは想像に難くない。

また、ケベックとの関連でいえば、やはり何よりもダニー・ラフェリエールに關す



ダニー・ラフェリエールと立花英裕会長（左）の対談「書くこと 旅すること」
(立教大学で開催された 2019 年 AJEQ 大会にて)

る仕事だろう。ハイチ出身のケベック作家で、2013 年からはアカデミー・フランセーズ会員でもある彼の小説の翻訳をこれまで 4 冊手がけ (すべて藤原書店)、さらに 2019 年秋には彼を日本に招聘して AJEQ 大会と日仏会館での講演を実現した。「不滅の人」とも呼ばれるアカデミシヤンの今回の来日には、2011 年の初来日のときとは比較にならないほどの苦労があった。資金面での不安に加えて、アカデミー・フランセーズで毎週開催される会議の合間を縫っての来日となったため日程調整も容易ではなかった。筆者も大会開催校の責任者として、「親日家のラフェリエールのことなので、かならず来てくれる」と信じつつも、飛行機に搭乗したという連絡がはいるまでは安心できなかったのを覚えている。

多忙な会長職を務めながら成し遂げられたこれらの「偉業」が認められての受章に心よりお喜び申し上げます。お身体を労り、これからもご活躍くださるよう、お祈りいたします。

●編集後記●

なかなかコロナ禍が収まりません。ワクチン接種が順調に進んだケベックは日常を取り戻しつつありますが、ここにきてデルタ型の影響が出始めているようです。ケベックを再訪できるのはいつになるのでしょうか。

そうしたなか、立花会長とエティエ名誉会員の叙勲といううれしいニュースが飛び込んできました。立花会長とともに AJEQ を牽引してこられた小倉顧問にご寄稿いただきました。また、ケベックの言語政策を本家たるフランスが受け入れる時代がやってきました。第一人者の矢頭会員が解説してください。荒木会員には、苦しきのなかにも明るさが感じられる大学院時代をふりかえっていただきました。巻頭では、杉原会員がこの秋の全国大会の企画の見どころをご紹介します。この秋も Zoom で！ (T)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎